末木文美士著

『平安初期仏教思想の研究』

(春秋社・一九九五年)

新川 哲雄

本書は、既に『安然・源信』『日本仏教史——思想史としてのアプローチ』『日本仏教思想史論考』等の著書を刊行され、これまで日本仏教、とりわけ平安仏教・鎌倉仏教を主たる対象にして、その教理研究を続けている末木文美士氏が、博士の学位論文に多少の手を加えられて公刊されたものであるという。

およそ八五〇頁にも及ぶ大著であるが、全体は論述篇と文献研究篇との二部からなっている。むろん、両篇は緊密な関連を持つっており、論述篇において論じられる教理上の問題の理解にとって不可欠ながら、未だ翻刻されていない文献、あるいは未だ十分な注解がなされていない文献が、文献研究篇に収められているのである。

このことから分かるように、本書は平安仏教に対して従来なされてきた研究の視座に対して、新たな問題提起を試みんとする意欲的な研究成果なのである。その問題提起とは、これまでの日本仏教研究が鎌倉仏教、とりわけ新仏教の研究を中心に

行われて来た動向に対し、その理由として、日本仏教思想の高揚期が鎌倉期にあると考えられて来たことを問題点として取り上げ、実は平安初期が日本仏教の最も生産的な時代であり、日本仏教思想の主要な問題は、既に概ねこの時期に示され活発に論じられていた、と説くことなのである。

以上の問題提起は、従来の日本仏教研究が方法と対象の両面にわたって大きな偏りを持っていたという、すでに先行論文の中で明らかにされている末木氏の問題意識から導かれたものにはならない。すなわち、方法面では、従来、歴史学と宗学の立場からの研究が多く、教理思想の研究を中心とする狭義の仏教学の立場からする研究が十分になされてきていないために、現在、宗派を越えた思想史研究が急務であることを指摘する。また、対象の面では、従来の日本仏教史の見方が、多く鎌倉新仏教を中心とするもので、古代仏教は鎌倉新仏教によって否定されるべきもの、あるいは新仏教の先駆・前提としてのみ見られ、たとえば平安初期の空海や最澄等は、その宗派内でこそ研究がすすめられたものの、より広い観点から思想的に位置付ける研究は殆どなされていなかったことを指摘する。

しかし、教理思想の面から言えば、平安仏教は極めて多面的に発展し、その後の日本仏教の基本的な性格付けをしたと言える大きな意味を持つと考えられる末木氏は、本書において平安初期仏教の、日本仏教史における思想的な位置付けを検討しようとするのである。末木氏のこれらの指摘は、日本仏教研究の現

状に対する問題点と今後の課題を明確にしたものとして、重い意味を持つと言わねばならない。

二

本書は、「安然の思想形成を中心として」という副題を持っている。このことから分かるように、末木氏は先の問題の検討にあたって、天台密教教理の事実上の大成者である五大院安然を取り上げ、彼の思想形成を検討の軸に据えている。これは、一つに、安然において平安初期仏教が集大成されたと考えられ、もう一つには、安然において後の日本仏教の大きな流れとなる一つの方向、すなわち本覚思想に連なる「現世主義的傾向」の方向が顕著に示されたと考えられるからだ、と末木氏は説いている。筆者も、既に安然研究の著書を発表しているもの一人として、末木氏の安然に対するこの評価には全く同意するものであり、氏の検討方法は、平安初期仏教研究にとって適切で有効なものであると思う。

いま指摘した「現世主義的傾向」とは、末木氏の考えによれば、最澄の大乗戒思想や一乗思想、あるいは空海の即身成仏思想を継承し展開した地平から生じてくる、日本仏教の特徴的な性格の一つなのであろう。すなわち、最澄以後の天台密教の形成発展において、密教と天台開會思想の統合により仏教教理面での現実主義的傾向が進展したが、その頂点に安然が位置しているのを見るのである。安然以後、平安中期に至って、末法思想

の浸透にともなう浄土教信仰の広まりにおいては、むしろ現世否定の傾向が強まるものの、平安後期において、特に叡山天台において本覚思想の形成が始まり、中世の口伝法門において極限にまで達すると、末木氏は平安仏教を概観した上で、平安末期における証真のように本覚思想を真正面から批判した天台僧の登場を経て、鎌倉新仏教や南都の旧仏教改革派は、そうした本覚思想の修行不要論に対し、新たに実践の立場を取り戻そうとする問題提起をなしたものと位置付けるのである。この概観と位置付けについても、平安仏教研究を課題にして来た者にとつては、今日、正当なものと首肯できることである。

以上の理解のもとで、末木氏が日本仏教における「現世主義的傾向」と呼ぶのは、氏の言葉によれば、「迷いの世界そのものがすべてそのまま悟りの世界の展開であり、悟りの世界の現れ」であり、その観点からすれば「この世界の中に否定すべきものはなにもなくなってくる」「すべてが悟りとして肯定されることにもなってしまう」のであって、「この世界のままですでに成仏した世界であるということにもなってくる」という、インドや中国の仏教には見られない、日本に独特のこの世界の見方なのであろう（本書、五一―五頁）。

この見方が草木成仏論として展開されれば、「草や木が芽生えて、花を咲かせて枯れていくその自然のままの姿がそのままに成仏の姿である」（本書、五一―三頁）とされ、即身成仏論として展開されれば、凡夫のその身そのまま、ありのままの姿での成

仏という所までおし進められていく。それを末木氏は「現世主義の最も徹底した形態で、修行をも不要とする『あるがまま主義』とも言うべきものにまで至る」と説いている(本書、一一頁)。

こうした現世主義的傾向の極まった本覚思想を、本来インドで始まった仏教とは非常に異なった、「仏教が日本化した一つの極限」(本書、五〇一頁)と末木氏は論じ、それが以後の日本のさまざまな文化、さらに言うところ日本人の自然観全体に非常に大きな影響を及ぼしたとし、それ故にこそ、この問題はひとり仏教の問題にとどまらず、日本文化全体の問題として研究してみることがある、と指摘するのである。

が、本書で末木氏が明らかにしようとしたのは、そうした大きな視座に立ちながら、先に述べたような日本仏教における「現実主義的傾向」を形成させた基盤、その基礎理論と見なし得る教理思想であり、それを厳密な文献解釈に基づいて説明せんとしたのである。この時、浮かび上がってくるのが、「大乘起信論」に記された真如論である。中国仏教では華嚴宗がこれに着目し教理の中心に取り込んで発展させたが、日本では天台宗においてまず最澄がこれを取り上げ、それを安然が教学の中心に据えて独特の天台密教教理を大成させたのである。そこに、本書において、安然の思想形成を軸にして平安初期仏教思想を検討せんとする構想が成立する所以がある。

その結果、当然のことながら、本書において安然の思想が全体的に取り扱われるわけではないことになる。すなわち、先の

検討のために、主として安然の円教教理に関する著作、および密教教理に関する著作が取り上げられ、その思想説明が中心となるのであって、安然の著作の中で大部分をしめる密教事相関係の著作は取り上げられることはない。

三

本書は、安然の思想形成の解明という観点からして、以下に述べるような構成をとっている。

既述のように、本書は大きく論述篇と文献研究篇とからなるが、第一部の論述篇は、中心となる六章に序章と結章とが付された部分に、本論理解への参考となる付章が加えられている。この付章は、本書理解へのよい手引きとなる、末木氏の講演記録である。

序章は「課題と方法」と題された本書の序論で、従来の日本仏教研究の問題点の指摘に始まり、方法と対象、そして本書の課題と概要が記されたものである。

続く第一章は「平安仏教と安然」と題され、以下の二節からなる。第一節「平安仏教思想史の概観と研究の現状」では、近年の研究動向を踏まえつつ教理の観点から平安仏教思想史を初期・中期・後期の三期に分けて概観した上で、本研究を平安初期(九世紀末頃まで)の仏教思想史に位置付けて、その意義を明確にせんとする。これをうけて、第二節「安然の生涯と著作」では、本研究における検討の軸となる安然について、従来の研

究を踏まえながら現状を明確にし、『即身成仏義私記』『斷定草木成仏私記』『教時諍論』等を安然初期の主要著作とみなし、『教時問答』『菩提心義抄』を後期の代表作と考え、「その間に顕教的な問題意識から密教への転換があったという仮定のもとに論述を進めることとしたい」（本書、五七頁）と、本研究の見通しを明らかにしている。慎重に、末木氏は「仮定」という言葉を使われているが、十分に首肯しうる本研究の基礎的な前提である。

以下の第二章から第六章までの五章が、本書の中心となる論考である。

この内、第二章「諸宗の論諍と教判（一）第一〜第三期」と第三章「諸宗の論諍と教判（二）第四期」とが対になっており、内容はその章題からも知れるように、奈良時代から平安初期に至る間の、仏教諸宗間でなされた論諍の主なものを取り上げ、その推移・展開を四期に分けた上で、簡潔に概観して見せてくれたものである。が、末木氏の力点は、四期のうち三期までを第二章にあて、四期に第三章全体を当てていること、またその記述から見ても四期で展開された問題にあり、そこに至るまでの日本仏教思想史上の教理論諍を概観することにより、第四期で安然によってなされたそれまでの論諍の整理が、単にこの時期の論争の総括であるにとどまらず、インド以来の仏教史全体の総括をめざした規模の大きなものであることを明かし、彼が打ち立てた「四一教判」が壮大な規模で行われた平安初期の諸

宗の論争の最終的帰結であると評価し、もって安然教学の占める思想的な位置を明確にする。有効で十分な対象の選択の上で、文献の厳密な解釈を踏まえた手堅い議論であり、我々に平安仏教思想が持つ思想上の意義を明らかにしてくれている。

これをうけて、いよいよ本研究の核心部分をなす第四章「即身成仏論」と第五章「草木成仏論」が検討されるが、これも二章が表裏一体のものとして対をなしている。これは末木氏自身が「即身成仏と草木成仏というのはいわばセットになった問題」（本書、五二頁）と説いていることから知れることだが、その点を理解することが、まずこの両章で論じられる問題の理解に不可欠だろう。

それは単に、両者が共に仏教における成仏論の問題ということではない。インド、中国、そして日本と、仏教の大きな改革運動（という一つの評価そのものが問題にされる地平に、位置付けられる検討課題として、仏性論はある）として展開された大乘仏教思想において、その核心部分をなす「一切衆生悉有仏性」説を最も先鋭的な形で展開しているのが、此処で問題にされる「即身成仏」と「草木成仏」なのである。

末木氏は、それを両章において、それぞれの論がこれまでの仏教思想史において如何に形成されてきたかという問題からまず説き明かされ、その上で安然の即身成仏論と草木成仏論を検討してその意義を明かし、それが安然以後、どのように展開されているかを論じている。何れも堅固な同じ構成をもつ章であ

る。

ここでも、紙面の都合上、両章の内容に詳細に立ち入ることは避けることにするが、第四章の冒頭、即身成仏思想が日本仏教思想の主流になっていく理由として、末木氏が指摘されている理由、そもそも日本や中国では死後の観念そのものが明白ではなく、まして永劫の輪廻の観点は仏教が持ち込んだものの、本来の形では必ずしも定着することがなかった、とう指摘は（本書、二七二頁）日本仏教の特異性を考える上で、重要な観点となるものであろう。また第五章において、安然における有情と非情の同一視が、万物に神の存在を認めるアニミズム的な考え方に基礎を置きながらも、木石の精たる「主託神」の観念を否定することによって、在来の宗教からの単純な連続性を拒否し、それを仏教的に解釈し直そうというもの、という指摘も（本書、四〇四頁）仏教の日本化を考える上で、やはり重要な観点を提示してくれたものと思われる。

何れにしても、第四章第二節「安然『即身成仏義私記』」、同第三節「憐昭『天台法華宗即身成仏義』」、及び第五章第二節「安然『斷定草木成仏私記』」の三節は、次の第六章第二節「教時問答」における真如論」とともに、本書が示した新しい研究成果の核心部分である。とりわけ、安然と憐昭の即身成仏義を比較検討した点は、興味深い考察であり、今後の即身成仏論研究にとって大いなる成果であらう。しかも、そのような新しい成果が、厳密の文献考証のもとに、抑制のきいた論考として記述

されていることは、恐らくその記述の平明さを意識的に心掛けておられる点と相まって、末木氏の学問的姿勢を良く顕すものであると思われる。

しかしながら、今あげた章節を一読してみれば分かるように、内容は煩瑣とも思える教理上の細かな文言や語句をめぐっての議論に終始しているのである。言うまでもなく、安然の教理想理解にとって、それが不可欠なことであり、それなしに安然を論じ得ないのであり、したがって、それらの章節が、本書の核心部分だからといって、そこだけを取り出して読んだのでは、恐らくよほど仏教学のこの領域の専門家でなければ理解することが困難な論考であると言えるであらう。これら核心部分の論考の理解の前提として、二七〇頁にも及ぶ三章までの考察が必要であったと、了解できるのである。

これをうけた第六章「仏性と真如」では、安然の即身成仏論や草木成仏論が成立する根柢となる教理について検討するものである。ここでも、それに先立って、仏教思想史上に先行する真如論を、主として法宝の真如所縁縁種子論を中心に説き、次いで安然の真如論の特徴を見るために「教時問答」を取り上げて検討し、彼の真如論の特徴が「随縁真如」の強調にあることを明かし、それが成仏論の根柢になっていることを論じる。そして、安然以後の真如論の展開を見るために、源信の「一乗要決」と高山寺蔵「真如観教」を取り上げて、その真如論を紹介し、それが安然の論と比較してどのような意味を持つかを指摘

している。本章は、とりわけ末木氏の仏教思想史に対する広範で正確な理解をもとに生み出された、今後の安然の思想の全体像の理解にとって重要な鍵となる論考と思われる。

最後の結章では、安然の即身成仏論・草木成仏論、及びその根柢としての随縁真如論によって、後の本覚思想に連なる現象世界の全面的な肯定への道が開かれるに至ることを指摘するために、安然以後の平安仏教の展開を検討する見通しを、主として源信の『往生要集』・『阿弥陀仏白毫観』に見える白毫観を取り上げて検討し、それが後の本覚思想に継承され展開されていくことを示すことで、結びにかえている。が、源信の白毫観の意義については鮮明にされるものの、惜しむらくは、此処までに論じられた安然の真如論などと源信の論がどのような関わりになるのか、それほど十分に明かされているように思えない。短い結章の中で十分な検討が困難であるのは理解できるが、本章を末木氏の今後の研究への見通しと受け止め、明確な論考を期待したいと思う。

以上の第一部の後に、第二部の文献研究篇では、論述篇の基礎となり、その理解を助ける主要な文献六書が取り上げられ、それぞれ必要度に応じて、本文・校注・訳・注が収められている。収録されている文献は以下の六種である。

- 一 安然『即身成仏義私記』（校注・訳・注）。
- 二 憐昭『天台法華宗即身成仏義』（本文・訳・注）。
- 三 千観『即身成仏義私記』（本文）。

- 四 安然『斟定草木成仏私記』（本文・訳・注）。
- 五 法宝『一乗仏性究竟論』真如所縁縁種子章（本文・訳・注）。

六 高山寺蔵『真如観教』（本文）。

この殆どが初翻刻の文献であり、本書の理解にとつてのみならず、今後の平安仏教研究のための基礎資料文献集としても貴重なものといえる。このような文献の活字翻刻を喜びたい。しかも、積極的に平明な訳を試みられている末木氏の基本姿勢は、今後の研究の在り方を考える上で注目すべき点ではあるまいか。難解な文献を難解なまま留めておくことは、決して学術的であることにはなるまい。

四

本書を通読してまず直ちに了解されるのは、著者末木氏の厳密な文献考証に対する態度と誠実な文献解釈に基づく、堅実な考察に貫かれていることであろう。その結果として、今後の平安仏教研究にとつて必ず踏まえられるべき大きな成果が生み出されただけでなく、日本仏教史全体の理解にとつて避けて通ることの出来ない本覚思想の、先駆けとなる安然の思想の持つ意義が明らかにされたことは、仏教の日本化という大きな問いに答える有効な指針が示されたことを意味するだろう。その意味で、たんに仏教思想史や平安思想史を志すものにとつてのみ読まれるべき書ではなく、広く日本思想史研究をめざすものにと

つて読まれるべき書であると思う。

このように評価する根拠の一端をあげて、この書評を終えたい。すなわち、末木氏が本書で明らかにした安然の随縁真如論は、従来の仏教経論には見られない全く独創的なもので（その意味で、仏教教理としては批判の対象になるのだが）、迷妄の根源たる無明をも真如の変化したものと明言する説なのである。とすれば、無明によって引き起こされる全ての迷いや煩惱もみな真如の変転したものと言うことになり、あえて悟りを求める必要はどこにもないことになろう。このような徹底は、現象世界の即自的な肯定につながっていき、本来、仏教がもっていた厳しい現実否定の契機が全く失われることになる。やがて、こうした現実肯定が、日本の中世天台において、本覚思想としてさらに極端にまで押し進められるのだという（本書、四六三頁）。明快なパースペクティブであると思う。

以上の見通しに基づいた、最澄・空海から証真に至るまでの平安仏教思想史が、近い将来、末木氏によって明快に論じられることを待ちたいと思う。

（学習院大学教授）

佐藤勢紀子著

『宿世の思想——源氏物語の女性たち』

（ベリかん社・一九九五年）

柏木 寧子

思想史学的研究は、『源氏物語』における宿世の思想をいかに捉え返し得るか。また、『源氏物語』における宿世の思想の研究は、平安時代人の心思の実態に近づくこうとする思想史学に対し、何を資し得るか——佐藤勢紀子著『宿世の思想——源氏物語の女性たち』が企図するところを最も大掴みにいえば、こうなるだろうか。

著者は、平安時代人の人生観・世界観の一つの基調をなしていたと見られる宿世の思想について、『源氏物語』本文の詳密な読解を通じて、鋭くその核心に迫っている。従来の論考がともすれば定型的表面的な表現形態にしか目を向けてこなかったのに対し、著者はあるいは文脈が、あるいは作中人物の特定の意識様相が、宿世の思想の表現形態たり得ていることを示す。新たに見出された表現に基づき、宿世の思想の真相を解き明かしていく過程には、著者の本領が遺憾なく発揮されている。

本書は三章から成る。これまで十余年間に公刊されてきた諸論文をもとにしながら、全体が緊密な連関をもって構成されて